

副作用カードで防げ

但馬の医療機関連携

医薬品による副作用の再発を防止しようと、但馬地方の医療機関で、患者ごとに副作用を引き起こす薬剤を明記した「連絡カード」の運用が広がっている。患者が受診する際に提示することで、副作用についての情報を医療機関で共有していくのが狙いだ。



(病院・科・薬局名)

原因・症状記し情報共有

医薬品による副作用の再発防止につなげるため、但馬地域で運用されている連絡カード―養父市八鹿町

きっかけは07年の夏、養父市八鹿町の公立八鹿病院での症例だった。手術中の患者に抗生物質を注射した際、副作用で血圧低下などのショック症状を起こした。患者はその後回復したが、院内で再発防止策を考える中で提案されたのが連絡カードだった。

副作用が確認された場合、従来も患者に病院から副作用についての情報は伝えられていたものの、ほかの医療機関を受診する際には、患者自身が問診などで副作用の有無を回答する必要があったため、専門的な医療情報がきちんと伝えられない恐れがあった。

連絡カードでは、医師が必要と判断すれば、副作用の原因となった薬と症状、アレルギー物質などについての情報を病院が記入する。患者がほかの医療機関を受診しても、健康保険証と一緒に連絡カードを提示することで、副作用を起こしやすい薬の処方を選ばれる仕組みだ。

八鹿病院での取り組みが呼び水となり、県病院薬剤師会但馬支部の呼びかけで、昨夏から但馬地域で統一様式の連絡カードの運用が始まった。八鹿病院の小野山真一郎・薬剤部長は「副作用は最悪の場合、死に至る危険性もある。より多くの医療機関で連絡カードが使われることで、安全な医療を提供したい」と話している。